
ないものねだり

神狩夜アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ないものねだり

【Nコード】

N4035J

【作者名】

神狩夜アイ

【あらすじ】

私の喪った家族は、どこを探せば見つかるのだろう。

どうしてキスをする前に泣くの。ヒロからそう言われたことがある。こういうとき、理由をどんなふうに説明すればいいのだろう。

私には父親がない。本当にコウノトリが連れてきたんじゃないかと思うほど、見事に、私の記憶から父親のメモリーがすっかり消えている。私が生まれる前から既になかったということは母親から聞かされていたが、しかし、人が巡り巡って六十億人もひしめくこの中で、父親がいないなど然程珍しくもない境遇とはいえ、格差社会化している日本の片隅にいる庶民の私にとっては、大きな、それは大きな喪失だった。いや、それより最初からないものだと思えば、それは喪失とは言い難いのもかもしれない。

ヒロに初めて抱かれた時、私は泣いた。痛みや恐怖の要素はなく、ただひとつ、二つ年上の彼の背中が広く大きく、がっしりしていて、そこに大人の男の姿を見せ付けられ、私は久しぶりに喪失感を味わった。当たり前のもがないという「喪失」とは何なのだろう。私にはまだ分からなかった。

世界には、日本人が当然と思い込んでいるものを先進国に住む他者の手によって剥奪されている国がたくさんある。親がないどころか、着る服も、家も、友達もいない子供たちがいる。私の年では既に働いて子供を産んでもおかしくない世界が、私たちの枕元から数千キロ離れた場所にあるのだ。それを考えれば、贅沢な喪失感だと叱咤されるだろうか。ただ単に、私は日本の地でそんな世界の子供たちのような気分にいるだけだ。

私の命がこの世に生まれた瞬間を始まりとするならば、それ以前から存在しないものを「喪失」と果たして呼べるのだろうか。鑑みるに、私にはないものばかりだ。それも、愚かな日本の国民が当然だと言い張るものばかり。

私には、どんなに苦痛に締め上げられても、泣き言を露呈する勇

気はない。

二十になるうかという冬、ヒロに抱かれ私は処女を「喪失」した。ぬくもりの代わりに私は失ったものがあつた。どうせいつかは失くしてしまうのだから、と開き直つたが、ベッドの上で横になりながら後ろから抱きしめてくれたヒロの腕があまりに温かくて、私は泣いた。

どうして泣いてるの、とヒロはとびきり優しい声で囁いた。私は答えなかった。何故私には父親がいないのだろう。ヒロにはいるのに、どうして私にはいないのだろう。本当は欲しかった、「当たり前」の存在の温かさ。欲しかった父親の存在。私の家族。

この世界は、足りないものばかりで構成されている。後々になり、技術の数々が足りない穴を埋めるようになって、果たして人の心に空いた風穴は埋められるだろうか。私が失つたもの。片親の存在。感覚すら抜けていくその人生の補助的な必要条件を、私はただ、求めていた。

欲しかった父親の温かさが、ヒロの腕の中にあつた。抱かれながら、私はひたすら泣いた。人の肌つてこんなに温かいのだと、私は初めて知つたのだつた。それすらも分からない私は何なんだろう。あまりに人間として不完全すぎるんじゃないか。少なくとも、先進国日本で生まれた者として。

しかし、先天的な喪失を抱えもって生まれてきたが故、最初から何かしら抜けているものがあるのだということは幼少期から直感的に気づいていた。父親という概念すらなかつた幼児の私。ヒロに求めてしまうことは迷惑だろうか。私が欲しかったものを、私が失つていたものを、彼に求めることは他力本願だろうか。

二歳年上のヒロと身体を重ね、私は何も言わず、彼を抱きしめた。大きくて広い胸に顔を埋め、手を背中に回して離さなかつた。どうしたの、とヒロが聞いても答えなかつた。高い高いも、肩車も、何もしてもらえなかつた私。最初からないものを、過ぎていく全てのものに追い求めるといふ行為は、ただ自分が傷ついていくだけの無

駄な悪あがきなのだろうか。見つかるはずがないと誰が決めた？
そう綺麗事を言ってみるものの、現実には音楽の歌詞や少女漫画のよ
うに上手くいかない。

お父さん、私のお父さんはどこ？ 幼い私は母に何度も聞いてい
た。そのたびに怒られ、叩かれた。あなたを捨てた男よ、そんな奴
を父親と思うんじゃない。母はいつもそう言った。そして私が何か
悪いことをすると、やっぱりあの男の血を引いているのね、とまた
叩かれた。仮に現実として、妻と娘を捨てた下劣な野郎だとして、
血を、遺伝子を与えられたことには変わりない。たとえ母が彼を夫
だと思い込んでいなくても、私にとっての血縁を持った家族なのだ。
父と同じ血を持たない母の非情な言葉に私は圧され、高校生の時に
初めて彼女を叩き返した。あんたにとつては所詮他人だからそうい
うふうにお父さんを貶められるんだ、と。

家族が欲しい。私にとつての、変わらない、何者をも侵害するこ
との出来ない、幸せな家庭が欲しくてしょうがない。

一度だけ、そういうことをヒ口に漏らしたことがある。彼は私の
家庭の事情を知っているが、私が学校ではあまりに明るく振舞うも
のだからとつくに吹っ切れて自分の道を歩んでいるのだと思い込ん
でいたらしい。泣きながら、お父さんが欲しかった、と何度も叫ぶ
私をヒ口はずっと抱きしめていてくれた。彼も理解しづらだろう、
片親のいない、何かが抜けた家庭というものが。

きつとどこかで間違いを犯さなければ、私も親子円満の家族で育
ったのかも知れないが、そういう当たり前の家庭が先天的に欠けて
いる私の中には、概念としての父親が存在していなくて、もはや「
失っている」という神経の認識すらも、抜けていた。喪失した世界
が当たり前になっていった。

失ったものが多すぎる。同じ境遇でいなければ分からない、当然
の剥落。

どうしてこの国は、有り余るほど物が溢れかえっているのに、こん
なに貧しいのだろうか。

こういつた家庭事情も、崩壊目前の日本としては至極当然として受け止められる悲惨な現状なのかもしれない。ただ、人々の目にそういうことが写りがたく、認識されがたい。だからこそ、場合によってはさらにと流されることも多い。誰にも理解されるはずがないのだ、先天的に失っていたものへの執着心など。

私だって馬鹿正直には語らない。聞かれれば答えるかもしれないが、基本的に自分の中で「何か欠けている」という日常的な自覚はないので、友達と騒いでいる席で語れるような神経は持ち合わせていない。しかし、ヒロにはどうしても、求めてしまった。私が失い、また奪われ、「喪失」とは言いがたい喪失感の元凶となった父親の面影を。

君が大学を卒業したら、結婚しよう。そして二人で幸せな家庭を作ろう。父親、母親、そして子供のいる、幸せな家庭を君に教えてあげる。

ヒロはまっすぐに私を見つめてそう言った。それは神から気まぐれに与えられた救いのようだった。なくしたものの、最初からないもの、それを追い求めることは、あまりに苦しすぎた。私は泣いた。求めた憧憬のすぐ近くまで手が届きそうな気がして、あと少し、あと少し進めばいい、と嬉しくもあり、また自分の認識されがたい境遇を思い出して辛かった。

家族が欲しい。それでも、私は家族が欲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4035j/>

ないものねだり

2010年10月8日15時15分発行